

Title	懷徳堂関係研究文献提要 (三)
Author(s)	
Citation	懷徳. 1985, 54, p. 112-115
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90651
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

同

羊羹

饅頭券

茶一袋

虎屋落雁

金百疋

鹿呉茶
酒一樽

銀耆奴五分

松茸

南鐘一片

酒一陶

生姜糖

四奴三分

金十八両耆歩式朱
銀百十四奴九分

大和や金兵衛

滋岡亀蔵

一向僧可淨

小泉多美衛

岡田織悦

七里鎌倉兵衛

岡田彦兵衛

岡田卯左衛門

鴻池伝兵衛

藤田与市

小西新助

柳生長兵衛

中務

池上新助

金山重左衛門

〈懷徳堂関係研究文献提要(三)〉

(7)論文・竹安繁治「大阪町人思想史の一齣——学問

意識と身分意識——」(『ヒストリア』第15号・昭和

三十九年)

本論文は、近世大阪における町人思想の一面を、懷徳堂を中心として考察しようとしたものである。その視点は、①近世庶民階級における学問意識の発達は、封建的身分意識に対する学問意識の対抗、ひいては後者による前者超克の過程に認められる、②それは具体的には庶民学者における専業・兼業の問題として顕現している、③これらの事柄は、経済的発達という現実的基盤を前提としている、の三点である。

第一の点について、筆者はまず懷徳堂の定約からその学問観を検討し、特に壁書第六条から、庶民の学問の在り方として考えられている四つの型を導き出す。即ち、第一は一般庶民の学問、第二は、一定の生業が学問以外に予想される同志としての学問、第三は学問を専業として世に処する者の学問、第四は庶民学の否定態としての学問である。言うまでもなく、あるべき庶民学者の態様としては前の三つの型が望まれるが、まさにそのことこそ身分意識に対する学問意識の優越を意味する、と筆者は指摘する。なぜなら、第一から第二、更に第三の型へ、というのが一般に学問意識展開の過程であり、かつ第二(兼業)から第三(専業)への転廻は、農工商などの原身分から専門学者へと、実質的な身分的変改への期待を含んでいるからで

ある。

続いて筆者は、懷徳堂における身分意識から学問意識への展開過程を現実化したものとして、壁書第二条から宝曆八年度学寮定書第一条への変化を挙げる。これは、前の規定が抽象的学問の世界における封建的身分觀念の支配の存在を認め、明文化したものであったのに対し、後の定書は、学問の世界から封建的身分觀念を、更には社会的経済的な階級差をも排し、学問的觀念を以てそれに代えようとしたものであったからである。

そして筆者は、右の如き変改が、贅庵の死を契機として行われたことに注目し、これを贅庵・石庵・五同志を中心とする草創当初の学問觀と、中井竹山を中心とする新しい時代の学問觀との対比を明らかにするものとしてとらえる。その上で、竹山こそ学者としての自覚をもって、固定的な身分觀念からの学問の独立を企画したものであり、そこには天下の大阪町人の実力と自覚とを社会的背景とした、合理的な学問意識の顯現が認められる、と指摘する。

次に第二・第三の点について、庶民学者の兼業から専業への移行の実態を明らかにする為、筆者は大阪の庶民学者の職業(専門学者については出身職業)を調査し、その結果、農工商その他を通じて富裕民層が多いということと、これらの富裕層に兼業学者が多く、下級庶民層に専門学者への進出が多く見られるということを発見する。この原因について筆者は、富裕民層において、学問を専業とすることが身分的経済的の何ら向上を齎もたらさないのに対し、下級庶民層にとつては、それがただちに社会的地位の向上を意味し、身分的にも経済的にも彼らの利害

にプラスする所が多かった為、と考える。この意味において、身分意識から学問意識への展開を現実化したものは、庶民階級内部における階層的な利害そのものにはかならなかったとする。

以上、近世大阪の庶民階級における学問意識の展開について考察を加えた後、最後に筆者は中井竹山の儒者觀を一瞥し、竹山は、民間の専門学者を制度的に認めることによって、封建的身分觀念よりの学問意識の解放を更に一步進め、身分制度そのものの中に積極的に学問的世界を打ちたたてようとしていた、とする。しかしながら、当時の民間学者の身分的実態は相当混乱しており、学問意識の独立ということは実現されていなかったと指摘し、とくに階層的な利害によって、学問意識を封建身分觀念のなかに閉込めておかなければならなかった点に、近世大阪庶民学の限界があった、と結論する。(竹田健二)

(8)論文・井上 実「懷徳堂学派の經濟思想——とくに中山竹山と山片蟠桃の經濟思想について——」(『史泉』第41号・昭和四十五年)

本論文は、懷徳堂学派の經濟思想として中井竹山と山片蟠桃の思想を取り上げ、兩者の学說の特質と差異とを明らかにしたものである。(一)はしがき、(二)財政論、(三)物価論、(四)外国貿易、(五)結びにかえて、以上五節より成る。

(一)中井竹山の『草茅危言』は江戸時代の社会經濟思想を考察するための必読書の一つであり、彼の門人山片蟠桃の『夢の

代」は、封建制の枠の中にとどまっていたとはいへ、その実証的合理性は当時であつては驚くべきものであつた。懷徳堂は庶民の教育を本旨としたが、町人の学問は町人社会の種々の生活体験によつて育成されるべきとき、独自の内容を附与し、必ずしも師説にとどまらない学説の推移を見る。以下、両著を比較しながらその見解の差異を把握し、その所以を論究する。

(二)財政について、蟠桃は王道政治の理想像を示した上で、現実には国家財政の原則として「入来ル高ニ合セテ遣ヒ出ス高ヲ定ム」という量入制出説を掲げ、経済的合理性を要求する。竹山もまた同一の説を主張して、さらに諸侯の財政窮乏を論じ、財政難打開策として諸侯の滞借整理、公役猶予、質素儉約など綿密な方策を論じている。蟠桃は特に奢侈をおさえ、儉約することを財政論の根本原則とみている。

(三)物価騰貴の原因として、竹山は貨幣改鑄と諸株運上を挙げ、その対策として「金錢二幣を釐正」し「諸株を停廢し、諸運上を一切恩免」することを主張する。蟠桃も貨幣品位説の立場から貨幣改鑄と物価の関係について論じ、物価騰貴の必然性を指摘する。しかし物価対策については竹山と異なり、物価は需給の関係で自然に定まるものであり、国家権力が無理に引き下げることとはできないのだから、専ら商人に任せよと主張する。ここには、幕府の物価政策を批判した蟠桃の経済的自由主義思想がある。また帳合米取引について、竹山はこれを排撃しているが、蟠桃はこの働きを高く評価し、相場師としての商人の機能の正当性、商業活動の自由を強調する。さらに彼は幕府の低米価政策を批判し、高米価論を提唱している。

(四)外国貿易は、竹山も蟠桃も認めている。竹山は無用な品の輸入禁止と金銀銅の流出の抑制を主張するが、金銀の流出よりも民用に切なるものとして特に銅の流出を痛嘆している点に、懷徳堂学者としての実用主義的な学問態度が読みとれる。彼は具体的には、わが国の貨物を多く輸出し、金銀銅による決済を減らし、薬種など有用品の輸入を主張する。蟠桃の金銀銅鉄の流出についての見解は竹山と異なる。蟠桃は「我邦へ金銀銅鉄多キニヨリテ」「コノ上百年、二百年過ルトテモ」不足することはないと言い、中井履軒の、金銀は国外へ流出しても買戻しが可能であるから惜しむことはないという説を支持する。竹山履軒・蟠桃は、金銀銅の用途的価値のみを評価し、貨幣ないしその素材としての条件を考慮していない。また蟠桃は外国貿易を認めてはいたが、ついに鎖国体制擁護論者としてとどまっていた。

(五)蟠桃は「竹山先生ハ我が常ノ師ナリ。ユヘニ論ズル処、ミナ先生ニ聞クトコロノモノ」であると言っているが、特に高米価論、幕府の物価統制反対、商業活動自由論、米相場論などに顕著な相違がみられる。このような蟠桃の主張は、彼がきびしい経済生活のうちに、経済現象についての鋭い感覚をもつてとらえた経済的法則性であり、彼の徹底した合理的思考が生んだ独創的立言であつた。ただ蟠桃の学問も竹山の学問も、その徹底した現実主義・合理主義のあまり、現鎖国体制を是認し、封建体制の枠を決して乗りこえはしなかつた。彼らが現実を直視し鋭い洞察力をもつて批判したところは、新しい事態に即応した封建支配の改良策であつた。(杉山一也)

(9)論文：藤井定義「懷徳堂創立のころと官許初講義」(『大阪府立大学 歴史研究』13号・昭和四十六年)

本論文は、筆者の「懷徳堂経営の一端」(木村武夫先生還暦記念『日本史の研究』所収)の続編であり、明治維新以降の大坂町人の消極的教育態度に対し、江戸時代全盛期に、その先人が彼らの学問所を創立・発展させていった積極的行為が、何故、どこから生じたかを探ろうとするものである。全篇は一、まえがき・二、懷徳堂創立のころ・三、五同志の略伝・四、官許懷徳堂初講義・五、あとがきの五部から成る。以下、まえがきを除く各篇の概要を紹介する。

二、懷徳堂創立のころ

経済発展の時代区分に従うと、懷徳堂創立の頃は、江戸中期(幕府成熟期)に相当する。しかし、享保の一七二〇年代を近代化の基点として取り扱うならば、解体期幕藩体制の変質期に入ったとも見られ、享保改革が実施された点を考慮するならば、下降期に入っているとも言える。

享保改革によって景気は沈静し、武士階級と下層階級の経済的困難は増大した。一方、町人の勢力・商業資本は次第に発展し、最終的には商業活動の中心である大阪に影響を与え、上方における文化の発達をみることになる。ちょうどこのころ大阪に生まれた学問研究の場が懷徳堂である。

懷徳堂創立と相前後して、蘭学・心学(石門心学)という二つの学問が起った。蘭学は主として自然科学系統の学問に限

られていたが、経済思想を実証的合理的傾向へと展開させた。大阪町人の学問に対する問題意識も、この点にあった。心学もまた、町人の知的欲求に応じ、封建社会における商業活動を是認し、実証的合理性をもたせた学問であった。

三、五同志の略伝

石田誠太郎著『大阪人物誌』、西村時彦著『懷徳堂考』、宮本又次著『大阪町人』、『東区史』等の先人の研究を参照し、懷徳堂創立に尽力した中村良斎・富永芳春・長崎克之・吉田可久・中山宗吉の、いわゆる五同志の略伝を載せている。

四、官許懷徳堂初講義

享保十一年十月五日の三宅石庵による「官許懷徳堂初講」、すなわち『論語』学而篇第一章・『孟子』梁惠王篇上第一章の講義の内容、及び講筵に列した徒役の氏名を掲載している。

五、あとがき

懷徳堂の創立は、実証的合理的傾向をもつ蘭学と心学の成立と軌を一にしたものであった。また、前掲の『孟子』の講義内容から、石庵が懷徳堂の講義において、町人に最も関係の深い、利に対する考え方を示している様子が窺える。

封建社会における大阪町人に、懷徳堂がどのような影響を与えたか、彼らの商業活動に合理性を見出し得たか、その思想が町人のよりどころとなり得たかといった点は、依然問題である。だが、これらの問題点の解明が、大阪町人の懷徳堂創立の目的が那邊に存在したかという、究極の問題解決の鍵である。